

# 学習成果の「<sup>み</sup>見える化」と学生の「質の保証」を目的とした 基礎教育の体系化

A research on assessment method of basic skills of junior college students

岡田 小夜子<sup>1</sup>, 甲斐荘 正晃<sup>1</sup>, 玉木 伸介<sup>1</sup>, 池頭 純子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学短期大学部家政科生活総合ビジネス専攻

Sayoko Okada<sup>1</sup>, Masaaki Kainosho<sup>1</sup>, Nobusuke Tamaki<sup>1</sup>, and Atsuko Ikegashira<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Department of Domestic Science, Junior College Division, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：基礎学力，社会人基礎力，見える化

Key words : Basic skills, Generic skills, Visualization

## 抄録

学生のキャリア教育を進めるために、基礎学力と社会人基礎力の向上を目指して、必修授業を利用し本専攻の全学生に1年間に亘って体系的に基礎教育を施した。その中でも基礎学力の充実の必要性は学生自身がかんじていることではあるが、地味で継続的な学習が必要なため、途中で勉学を諦めてしまう学生が多い。そこで学習成果の「見える化」を図り、学生の学習意欲を刺激した。その結果、基礎学力を大きく伸ばした学生が多いという成果を上げた。また国語や政経のように記憶することが点数の上昇に直結する科目は伸長度が高く、英語や地歴など暗記だけでは不十分な科目は伸長度が低いことが分析の結果、明らかになった。

## 1. はじめに

学生のキャリア教育を考える際に、基礎力の充実を図るのはもっとも重要なことである。基礎力は学生が直面する就職試験はもとより、就業してからも必要不可欠なものだからである。

基礎力には英語・数学などの基礎学力と経済産業省が唱える社会人基礎力がある。短期大学における学びのために、基礎学力は必要不可欠な力であり、一方で学生のキャリア教育を考える際、就業力ポートフォリオの一つとして、社会人基礎力を外すことはできない。

基礎学力の低下が叫ばれて久しいが、大学でも基礎学力の向上のために補習、補講、個人教授などで指導して対応しているところが多い。しかし個々の学生への基礎学力向上の施策では、全体的な底上げに繋がらない。キャリア教育とは個々に対応しても実効性が少ない。全学的な対応が連鎖反応を呼び、効果を大きくする。

そこで短期大学部家政科生活総合ビジネス専攻

では、必修科目で全専任教員が協力し、目的を明確にして全学生に体系的に基礎学力の向上を図ろうとした。

基礎学力の充実の必要性は学生自身がかんじていることではあるが、地味で継続的な学習が必要なため、勉学を途中で諦めてしまう学生が多い。そこで学習によって自らの学力の向上が明確となる、学習成果の「見える化」を図り、学生の学習意欲を刺激した。

また同様の必修科目で社会人基礎力の養成も行った。これは2つの力を向上することによって、企業への「質の保証」をすることが目的である。

## 2. キャリア教育における基礎学力と社会人基礎力

### (1) キャリア教育の内容

児美川<sup>4)</sup>は現代の大学におけるキャリア教育の内容を以下のように特徴づけている。

- ①社会や経済界の現実に対して学生たちの目をひらきつつ
- ②自らの将来設計や進路希望を明確化させたうえで、
- ③就職の際に企業側が求める基礎的な能力を身につけさせること
- ④上記の①～③を携えて、実際の就職活動につなげていくこと

本専攻のキャリア教育の内容も基本的には上記①～④ではあるが、対象が短大生なので①は薄目を開ける状態であり、②を明確にすることはかなり難しい。彼女たちは高校を卒業したばかりの年齢なので、自らの将来設計や進路希望の具体的なイメージをもつ学生は稀である。

しかし、現実として入学時からキャリア教育をして1年生の後半から始まる就職活動に備えなければならないので、本専攻のキャリア教育は③と④が主体となる。

### (2)基礎学力

基礎学力とは一般的な教養と学力を指す。教養については広範すぎるので、本専攻の目指す基礎学力からは除外した。本稿の基礎学力とは具体的には国語、社会、英語、数学の学力である。

これらの学力の向上は2つの目的をもつ。第一は言うまでもなく就職試験に合格するためである。第二は学生が就労してから職務遂行のために必ず必要とされるためである。

たとえば漢字の読み書きやパーセントの算出方法がわからないで、職務が遂行できるだろうか。本学に入学する学生の中には残念ながらパーセントの算出が不得手の学生も存在するし、明白な誤字を書いてそれに気づかない学生もいる。

基礎学力を上げることによって、企業側に学生の「質の保証」をするのである。

### (3)社会人基礎力

社会人基礎力とは経済産業省が定義した力である。ちなみに内閣府は「人間力」、厚生労働省は「就職基礎能力」、文部科学省は「学士力」と名付けており、その内容は表現の違いはあるが、意味するところは似通っている。

社会人基礎力の内容は、以下のとおりである<sup>[2]</sup>。

- ①汎用的能力...主体性、働きかけ力、実行力

- ②考え抜く力...課題発見力、計画力、想像力、
- ③チームで働く力...発信力、傾聴力、柔軟力、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力

前述のように高校を卒業したばかりの短大生に社会人基礎力の醸成を図ることは難しい。それでも、このうちのいくつかはキャリア教育の一環として、その向上に取り組んでいきたい。

## 3. 基礎教育の進め方

基礎学力と社会人基礎力の向上を図る教育（以下、基礎教育）は、2013年4月から2014年1月まで行った。

### (1)基礎学力向上のためのプログラム

授業名は本専攻1年生必修の「教養ゼミナールI」（前期）で、対象学生は88名である。

本専攻では数学は違う必修科目で教育しているため、基礎学力の科目は国語、英語、社会（政経、地歴）とした。4人の専任教員がそれぞれの科目を受け持った。

4月の授業開始時に上記4科目の全体テストを実施した。突然のテストであり、学生は当然ながら準備をしていないので、その結果は後述するが、惨憺たるものであった。それを刺激として翌週から始まる基礎学力の授業への意欲に結びつくように指導を行った。また専攻で独自に作成したテキストを学生に配布し、授業を行った。

基礎学力の定着を図るために、授業の翌週には必ず小テストをして、復習を促した。

それを12コマ学習した後、最後に全体テストを再び実施した。実はこのテストは4月の最初に行ったテストと同一の内容であるが、学生には事前に知らせず、試験範囲は12コマ学習した内容とテキストであるとのみ告げていた。

### (2)成績の「見える化」

ほとんどの学生が2度目のテストで4月の1回目のテストよりも好成績を残した。

学生の勉学の努力が実を結んだことを表すために、その結果を「見える化」した。

「見える化」とは文字通り一目で、自分の成長したことを、あるいは成長していないことを実感することである。学業の進捗率は簡単には計れないが、数字なら明白な結果となる。その数字を図

1の例のように、それぞれの科目について4月と7月のテスト結果を棒グラフにして示した。情報収集のおよそ8割は視覚からといわれているが、グラフは数字の羅列よりもかなりインパクトが強かったようだ。

棒グラフを手渡された学生の感想を以下に拾い出してみる。

- ・4月よりもはるかに出来が良くなっていた。ここまで点数が上がるのが実際にわかって、やれば出来るんだ！と自信をもつことができた。
- ・自分がした2か月の努力はムダなものではなかったと感じた。
- ・国語と英語がすごく点数が上がっていた。こうやって結果になって嬉しい。もっともっと基礎を勉強しなくちゃいけないと思った。
- ・わからないままにせず、きちんと勉強すれば結果は出るという事が再確認できた。
- ・ちゃんと勉強すれば変わるんだと思ったから、今回学んだことは忘れずに頭にいれておきます。
- ・前期の授業でこれだけ点数が上がるのであれば、後期も引き続き基礎を学び、点数をあげたい。
- ・日々コツコツ勉強する派ではなかったのですが、日々の努力が大切だということを思い知らされました。
- ・点数が上がったのがまったくなくて、どれほ

ど勉強していなかったかが、改めてわかりました。

### (3)社会人基礎力の向上を図るプログラム

授業名は本専攻1年生必修の「教養ゼミナールⅡ」(後期)で、対象学生は前期と同様88名である。

社会人基礎力の中でも、短大生にもっとも欠けていると思われる、主体性、考え抜く力、発信力にポイントをあててプログラムを作成した。

具体的にはグループディスカッション、夏休み実施したインターンシップに行った学生の報告会等を行い、学生間のワークを通してそれらの力の醸成に務めた。

グループディスカッションの経験が少ない学生なので、進め方の講義の後、テーマを設定し、討論、意見のまとめ、発表という順番でワークを重ねた。

グループごとにディスカッションしてまとめるワーク



## 4月と7月を比較して、あなたのテスト結果は？

○組○番 名前 ○○○○

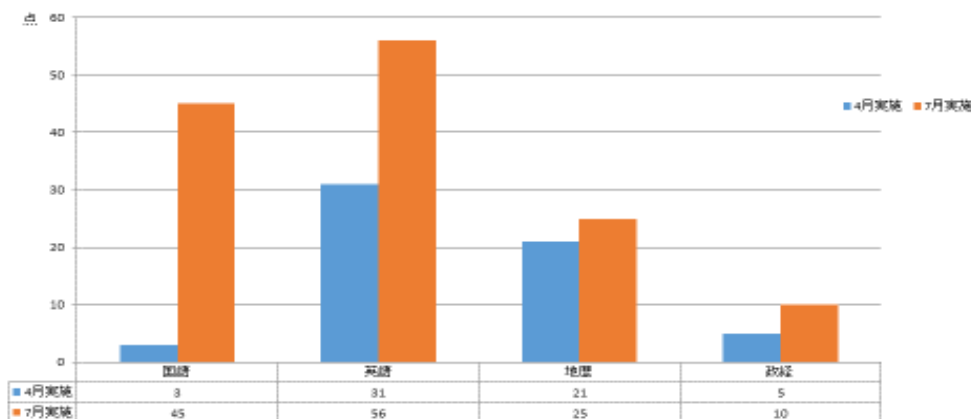


図1. 各学生に渡した試験結果のデータ「見える化」の例

#### 4. 試験結果の分析

##### (1) 平均点の変化の概要

試験は、ゼミ開始時点（4月）と終了時点（7月）の2回、4科目とも同じ問題で、学生に対しては同じ問題であるという予告をすることなく行われた。4科目のうち、2科目（国語及び政経。以下「第1群」という）は授業内容をそのまま覚えていれば高得点が得られるタイプの問題であった一方、他の2科目（英語及び地歴。以下「第2群」という）の問題は授業の内容や教材をきちんと消化していれば点数が上がるものではあったものの、教材の中身の丸暗記では必ずしも対処できない問題を含むものであった。

試験の結果、特に、4月時点と7月時点の平均点の変化についての記述統計的な特徴は、以下のとおりである。

第一に、4科目とも、平均点は大きく上昇した。

第二に、第1群の平均点は3倍弱と極めて大きく上昇した一方、第2群の平均点は1.5倍弱の上昇にとどまった。

第三に、各科目の変動係数（標準偏差を算術平均で除したものは、全科目とも低下した中で、国語の低下幅が最も大きかった。

##### (2) 各科目の平均点の変化

各科目の平均点（100点満点換算）は、第1群の科目（国語及び政経）では20点程度から60点程度へ、第2群の科目（英語及び地歴）では英語と地歴が40点台から60点台へと、各科目とも大きく上昇した。改善率については、第1群では3倍弱になり、第2群では1.5倍弱になった。（図2、図3）。

こうした変化を、各科目の平均点の変動係数を用いて描写すると、次頁の表1、表2のとおりである。変動係数は、標準偏差を算術平均で除したものである（百分率表示）で、変数のばらつきの大きさを相対的に比較することができる統計量である。

4月の試験では、第一群の科目の変動係数は、国語が66.4%で政経が43.7%であったのに対し、第2群の科目では、英語が38.9%で地歴が30.8%と、第1群の方が明確に高かった（点数のばらつきが大きかった）。

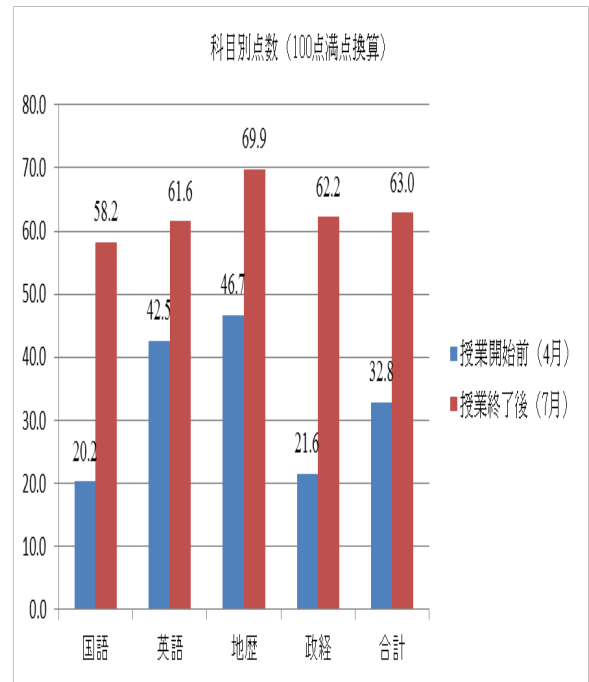


図2. 科目別の平均点

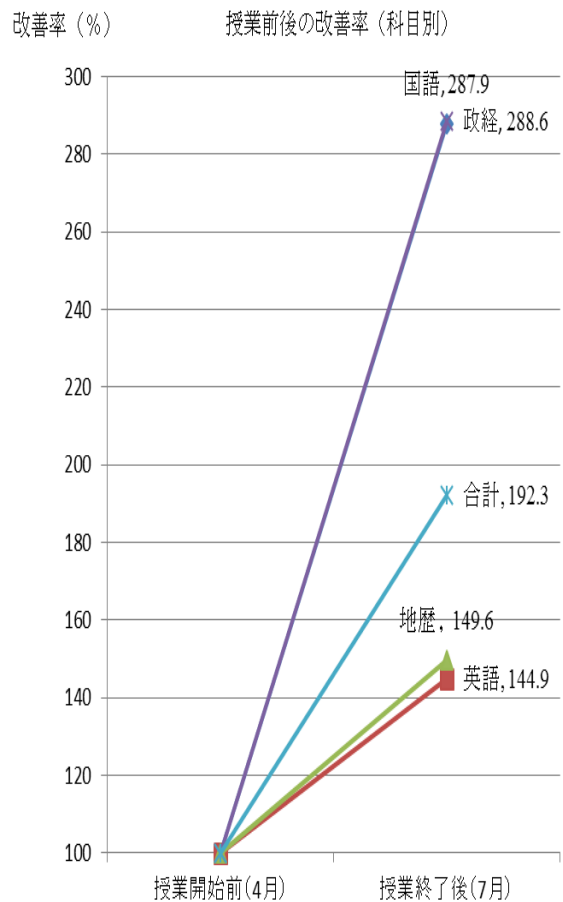


図3. 各科目の平均点の改善率



7月の試験では、第1群の科目の変動係数は、国語が41.5%で政経が30.2%と、4月に比べて国語が24.9ポイントも低下し、政経も二けた(13.6ポイント)の低下となったのに対し、第2群の科目では、英語が31.9%で4月対比7.0ポイント、地歴も23.3%で4月対比7.6ポイントといずれも小幅の低下にとどまった。このため、両群の変動係数の差はかなり縮小した。

このような変動係数の変化の差をもたらしたものは、各科目の平均点と標準偏差の変化の度合いの差である。国語の場合、4月から7月にかけて平均点は2.88倍になっているが、標準偏差は1.80倍にしかならない。このために、標準偏差を平均で除した変動係数は大きく低下した。他方、英語では、平均点は1.45倍になる一方で標準偏差は1.19倍であるから、変化の差は国語より小さい。地歴でも、平均が1.50倍であるのに対して標準偏差は1.13倍と、国語と比べた場合に英語と同様の関係が読み取れる。政経は、これらの中に位置している。

表1. 4月及び7月における各科目の平均(100点満点換算)、標準偏差及び変動係数

	群	科目	平均(A)	標準偏差(B)	変動係数(B/A, %)
4月	1	国語	20.2	13.4	66.4
		政経	21.6	9.4	43.7
	2	英語	42.5	16.5	38.9
		地歴	46.7	14.4	30.8
7月	1	国語	58.2	24.2	41.5
		政経	62.2	18.8	30.2
	2	英語	61.6	19.6	31.9
		地歴	69.9	16.3	23.3

表2. 各科目の変動係数の変化(4月→7月)

群	科目	4月(A)	7月(B)	差(B-A)
1	国語	66.4	41.5	-24.9
	政経	43.7	30.2	-13.6
2	英語	38.9	31.9	-7.0
	地歴	30.8	23.3	-7.6

このように、変動係数の変化に科目間の差が生じたことについては、各科目の試験問題の性格の差が寄与している可能性がある。

すなわち、変動係数の低下が顕著であった国語については、漢字や四字熟語のように、授業で扱ったことを記憶することが点数の上昇に直結する設問が多く含まれ、政経でも同様の傾向があったのに対し、

英語や地歴では授業内容の暗記だけでは不十分である設問が多かった。また、国語の場合、漢字の書き取りのように学生が慣れ親しんでいる勉強方法が有効である度合いが、他の科目よりも強かったということが言えよう。

## 5. まとめ

本専攻の全学生の基礎力を底上げしようとする試みは数字の上では平均点の大幅な上昇という成果をみせた。数字以外の成果は、当該学生の内定率の向上と、教員間のコミュニケーションの深化である。

当該学生の就職活動はまだ始まったばかりであるが、昨年2013年5月末と本年2014年5月末の内定率を比較すると2倍強の伸びを示している。就職活動は経済動向や種々の要因で毎年変化しているから、学生個人の基礎学力の伸長が内定率の向上に直接結びついたかどうかは無論断言できないが、基礎学力の向上が学生の自信の裏付けとなり、それが就職活動に好影響を及ぼしていることは言えるかもしれない。

指導は全学生を対象としているので、教員間の連絡は相当に密度の濃いものであった。毎週1回、専攻会議を開き、学生の情報交換、授業の進展状況の報告を1年間続けた。基礎力の向上のために、新聞記事を1~3つ選択し、その見出し・内容を記してレポートとして毎週提出を義務づけたのも、専攻会議からでたアイデアであった。

今年度の新1年生にも昨年同様、基礎学力と社会人基礎力の強化を目指し、専攻の教員が一丸となって指導を続けている。

今年度は全学的に学習支援システムであるmanabaが導入されている。早速manabaを利用して基礎学力のさらなる向上を図っているところである。

## 付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K090)の助成を受けたものである。

## 引用文献

- [1]児美川孝一郎 『若者はなぜ「就職」できなくなったのか?』第4刷 日本図書センター, 2012, p.40  
 [2]経済産業省 『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』 初版 角川学芸出版, 2008, p.28

---

**Abstract**

---

The purpose of this research is to show that providing students with their academic achievements in a visual manner raises motivation for further study, and this leads to better grade results in a large number of students. As part of their career study, students take courses in basic study skills and knowledge along with those for generic skills. They are part of one-year required courses. Although students acknowledge the importance of acquiring these skills, continued and consistent effort is necessary for achieving this goal, which often makes them less motivated. However, academic achievements presented in a recognizable form could solve this problem. Discrepancies in the results were observed among different subjects. While the results for Japanese and politics/economics made significant improvements over a one-year period, those for English and geography/history were less remarkable. This could be attributed to the fact that memorization has played a larger role in better score results for Japanese and politics/economics.

---

(受付日：2014年6月17日，受理日：2014年6月24日)

岡田 小夜子（おかだ さよこ）

現職：大妻女子大学短期大学部 家政科生活総合ビジネス専攻 教授

拓殖大学大学院言語教育研究科博士前期課程修了。

専門は国語学，秘書学。現在はビジネス文書，手紙に焦点をあてた研究を行っている。

主な著書：手紙を極める（単著，中央経済社），言葉づかいハンドブック（単著，PHP 研究所），ビジネスマナー1分間レッスン（単著，東洋経済社），正しくきれいな話し方・書き方（単著，PHP 研究所），コミュニケーション仕事術（単著，日本能率協会マネジメントセンター），秘書・オフィス実務テキストワークブック（共著，早稲田教育出版），オフィスワーカーの資質養成（共著，早稲田教育出版），パソコン活用による日本語コミュニケーション実践ノート（共著，風間書房），バイリンガルオフィスプロの基礎（共著，日本秘書協会）